

コレクション紹介 北條篤史昆虫コレクション

諏訪哲夫

ほぼ7年前の2015年4月、北條篤史氏は帰らぬ人となってしまった。享年75歳はちょっと早すぎた。

小学生のころからチョウが好きになり、そのころの彼の自宅が静岡市安東三丁目、NPO自然博理事の高橋真弓さんのお住いに近かったこともあり、高橋さんの薫陶を受けるとともに、静岡昆虫同好会の創立メンバー17人の内のひとりとして中学1年生ながら名を連ねた。

1955年（昭和30年）静岡市内ではこれまで発見されたことのなかった南のチョウのクロコノマチョウが突如大発生し、その調査に彼は大活躍し、その拡大の全貌を明らかにして同好会誌「駿河の昆虫」No.13に共同執筆した。大学生時代を経て最初に勤務したのは東京だったため、比較的採集に便利で、まだチョウについてあまり調べられていなかった山梨県を精力的に調査して多くの新しい発見をした。

勤務先が静岡市になって子供時代にネットをとともに振った仲間と再び郷土のチョウの調査に夢中になった。彼が最も関心を抱いたのはモンシロチョウ属の食性であった。この属には近縁な3種が生息しているが食草によって分布が制限されていること、特にヤマト（エゾ）スジグロシロチョウは、本来は比較的寒冷な山地に生息する種であるが、食草に関連して海岸にも生息していることなどを発見している。1979年、黒海とカスピ海の間にある、当時ソヴィエト連邦のカフカス山脈へ採集に静岡昆虫同好会のメンバー10人ほどで遠征した。これが一つのきっかけとなり、日本のチョウの分布のルーツを探るべく広く海外に目を向けるようになった。北條さんはロシア、中国、スペイン、トルコ、ラオスなど多くの国へ遠征した。現在は渡航の難しい情勢にあるミャンマーに2か月間も滞在して多くの成果を上げた。インドシナ半島にはモンシロチョウの倍以上もあるという *Pieris extensa*



モンシロチョウ属の標本



オオスジグロシロチョウ（左）
とヤマトスジグロシロチョウ（右）

（オオスジグロシロチョウ）が生息しており、以前から垂涎の的であったこの“お化けスジグロシロチョウ”の生息地を訪れ、環境を観察し、飛び方を目にしっかり焼き付け、標本にすることが最大の夢であり、それがかなったときであった。

彼の無類のお酒好きについては虫仲間でも右に出る者はいない。しかもいわゆる“いい酒”のみだった。採集から帰ってビールを飲みながら採集品の展翅をするのが至福の時だといつも言っていた。人柄は誰からも愛され、ある小説の登場人物のモデルともなり、また市内宇津ノ谷にある蕎麦屋「きしがみ」の開店にあたり大変尽力している。日本蝶類科学学会の理事、静岡昆虫同好会会長も歴任した。

晩年は標本をミュージアムに寄贈するつもりで自分なりの整理を行っていた。寄贈された標本は、箱数約200箱、頭数13000頭、内訳は日本産約7000頭、外国産約6000頭である。これらの標本の一部を除き大部分は登録済みである。

日本産の標本で特筆すべきものとしてチャマダラセセリ（旧大川村栃沢、1954年）、クモマツマキチョウ（山梨県甘利山、1967年）、オオウラギンヒョウモン（長野県入笠山、1963年）、ウラナミジャノメ（神奈川県真鶴半島、1969年）などがあげられ、すべて現在では絶滅した産地のものである。また、外国産の標本としてはやはり世界各地のモンシロチョウ属（*Pieris*）の標本が際立っている。